



歴史をたどるウォーキングツアー

コミュニティ

シドニーに住む様々な民族



写真提供: City of Sydney Archives



コミュニティ

シドニーに住む様々な民族



写真提供: City of Sydney Archives



このツアーはタウン・ホールから始まり、かつては産業地域だったシドニーの裏側を南に歩いて行きます。この地域の最初の建物は工場、作業場、最貧層の市民用の家でした。後にそこは倉庫や市場になりました。現在では、スパニッシュ・クウォータ、チャイナタウン、市で一番素晴らしいといっても過言ではない20世紀時代のアボリジニーの史跡があります。この地域には壮大な建物はありませんが、色彩の豊かさがシドニーのエスニックな多民族の社会史を語っています。



写真提供: Eva Rodriguez Riestra, City of Sydney



写真提供: City of Sydney



写真提供: City of Sydney Archives

コミュニティ

シドニーに住む様々な民族

i

チャイナタウン(Chinatown)



写真提供: City Projects, City of Sydney

約200年前からシドニーには中国人が住んでいました。当時のシドニーに住む中国人は市場向けの菜園師や商人でした。つまり、市場がある場所には中国人がいたわけです。1909年から1915年の間、市議会はダーリング・ハーバー(Darling Harbour)の先端に新しい市場の共同ビルを建て、中国人の商人や輸入業者に市場のスペースや倉庫として賃貸していました。特にディクソン・ストリート(Dixon Street)は店やレストランが建ち並びチャイナタウンの中心部となりました。店の2階は中国人の商人や、故郷に帰国できない退職した中国人の菜園師達の家になった時もありました。20世紀半ばには、この地区の活気は衰え、中国人の数も次第に減少し、市場は市外へと移動しました。1980年代にチャイナタウンは履修され、再び市内に中国人の数が増え、観光客には大変人気の場所となったと同時にシドニーに住む中国人のコミュニティの待合せ場所にもなりました。

Darling Harbour

Sydney Exhibition Centre

Tumbalong Park

Chinese Garden

Pier St

Sydney Entertainment Centre

Powerhouse Museum

Chinatown

Hay St

Paddy's Market

Quay St

Ultimo Rd

Thomas St

Town Hall

Bathurst St

Kent St

Liverpool St

George St

Goulburn St

Haymarket

Campbell St

i

ヘイマーケット(Haymarket)

1830年代以降この地区はヘイマーケット(Haymarket)として知られています。その当時、ここは町外れで家畜や干草の市場でした。1860年代に、フルーツや野菜の市場が建てられ、市場で働く人々の場所となりました。多くの中国人を含む市場向けの菜園師は独自の商品を市場に持ち込み、近くの寄宿所に寝泊りしました。店や調理場が建ち並び、パディーズ・マーケット(Paddy's Market)と共に何件の劇場によってこの地域は色づいていきました。ヘイマーケットは土曜日の夜になるとシドニーの下層階級の人々の溜まり場となりました。

ツアーの所要時間は約1、2時間です。



シドニーのタウンホール(Town Hall)①と近くのセント・アンドリュース大聖堂(St Andrews Cathedral)②から出発します。

1 タウンホール(Town Hall)



写真提供: City of Sydney Archives

シドニー市の地方政府の所在地であるタウンホール(Town Hall)は1869年から1889年にかけて、古き墓地(the Old Burial Ground)として知られる場所に建てられました。1792年から1820年の間に約2,000人もの人々がこの場所に埋葬されました。多くの墓地は浅かったため、住民はよく悪臭の不満を漏らしたものです。公認記録によると、住民にとってあまりに悪臭がひどかったため、墓地を閉鎖したようです。タウン・ホールの建設前に、墓地が掘り起こされたということです。現在でも、この地域で穴掘りをすると、行き場のない頭蓋骨が現われるかもしれません。

タウン・ホールの高いビクトリア朝の建築様式と過度な装飾は「ウェディング・ケーキの建物」と呼ばれています。1960年代にはこの建物を破壊するべきだと提案した人達もいたほどです。現在では、タウン・ホールの階段はシドニーの待合せ場所として親しまれています。



写真提供: City of Sydney Archives

2

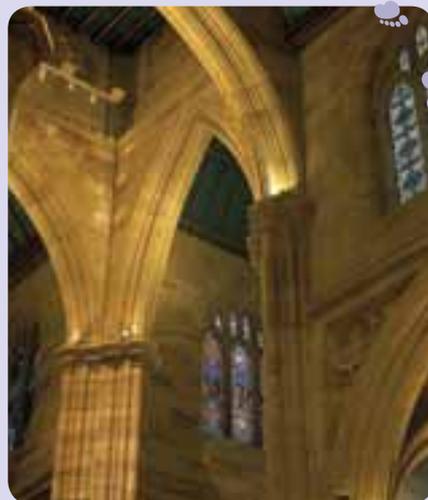
セント・アンドリュース大聖堂



写真提供: Gary Deirmendjian collection, City of Sydney Archives

エドモンド・ブラケット(Edmund Blacket)が設計したシドニーの英国国教会の大聖堂は古きヨーロッパ大聖堂の縮小版です。気がついたと思いますが、この建物の正面ドアは通りの裏にあり、そびえ立つ尖塔はシドニー・スクエアに面しています。ここにも通りがあるはずでしたが、

この建物の建設が終わった1860年代までには無くなってしまいました。この場所に大聖堂と広場を作る計画は19世紀前半ばにまで遡りますが、その当時、この場所は都心からだいぶ離れており、計画は真剣に取り上げられませんでした。19世紀後半まで、北には昔からある不用品の墓地があり、その近くはレンガ工場と市場といった寂しい場所でした。



写真提供: Gary Deirmendjian collection, City of Sydney Archives

ジョージ・ストリート(George Street)を南に歩き、バザースト・ストリート(Bathurst Street)の交差点を渡り、映画館を右手に通り返った角を右折するとアルビオン・プレース(Albion Place)③にたどり着きます。

3

アルビオン・プレース(Albion Place)

シドニーの通りは計画されて作られたわけではなく、習慣や偶然によってでき上がっていったものです。この通りのような細道は都市の至る所で目にする典型的な道です。この道の南側には今でも古き倉庫時代の面影が残ります。

突き当たりのケント・ストリート(Kent Street)を左折すると、砂岩造りの特徴ある赤レンガの倉庫があり、時代の変り目を見るのに適した場所だと言えるでしょう。ケント・ストリートの右手を見上げると、独立して建っているジョージア王朝風の家、裁判官の家(The Judge's House)④があります。

4 裁判官の家(The Judge's House)

1827年に建てられたこの建物は市内に残る数少ない独立して建っている家です。この家は1828年から1830年までニューサウスウェールズ州の最高裁判官ダウリングのために建てられましたが、100年近くもの間、その地域の貧困な人達用にシティ夜間保護所、無料食堂、チャリティー組合といった違った目的で使用されました。

セント・ストリートを更に歩き、リバプール・ストリート(Liverpool Street)との交差点を右折し、サセックス・ストリート(Sussex Street)に向かって歩きます。この地区はスパニッシュ・クウォータ(Spanish Quarter)として知られています。19世紀最後の10年間からこの地区にはスペイン人が住んでいます。サセックス・ストリートの手前にあるくの字のダグラス・ストリート(Douglass Street)/ダグラス・レーン(Douglass Lane) ⑤に入っていきます。

5 ダグラス・レーン(Douglass Lane)

ここもまた、かつては街の産業地域だった面影を残す細道です。馬を誘導しながら丸石を敷いた坂道を上って行く姿を思い浮かべてみてください。ここを真っ直ぐ行くとサセックス・ストリートにぶつかり、チャイナタウンが始まります。



写真提供: City of Sydney Archives

サセックス・ストリートを左折し、ゴールバーン・ストリート(Goulburn Street)との交差点を右折し、角に建つトレードズ・ホール(Trades Hall) ⑥に向かって進みます。

6 トレードズ・ホール(Trades Hall)

トレードズ・ホール(Trades Hall)はジョン・スメドレー(John Smedley)が設計し、1888年に建設が開始されました。この建物は何年もの間、労働組合の本部と会議場でした。今でも内部には20世紀前半の標識が残っている所もあります。この建物はメイ・デーやレイバー・デー(労働者の日)に行われるマーチに使用される大量の労働組合の旗が収容されています。中に一歩踏み出すと、「ザ・インターナショナル」を歌う甲高い声が聞こえてくるようです。

トレードズ・ホールの向かいにある儀式的の門を歩いて行くと、シドニーのチャイナタウンの中心部であるディクソン・ストリート・モール(Dixon Street Mall)にたどり着きます。また、儀式的の門を右折して、まっすぐ向かうとダリング・ハーバー(Darling Harbour) ⑦にある中国庭園(Chinese Gardens)の長閑な静養所に着きます。1988年で、シドニーの非先住民の集落は200年を迎えました。歴史ある中国南部の広東市はこの庭園を歴史の浅いシドニー市へ200年記念として贈与しました。シドニーに住み始めた当初の中国人は広東市出身でした。

ディクソン・ストリート(Dixon Street) ⑧を突き当たりまで歩き続けます。この辺りにある殆どの中国の会社は新しいですが、49番のウォー・ヒン(War Hing)は何十年も前に遡ります。52-54番のオーガスト・ムーン(August Moon)レストランは新しく見えますが、この場所の中華レストランとして半世紀以上経っています。トーマス・ストリート(Thomas Street)に向かってパディーズ・マーケット(Paddys Markets) ⑨を歩き、ウルティモ・ロード(Ultimo Road)を右折し、キー・ストリート(Quay Street)に向かうと、シドニー・マーケットのベル・タワー(Sydney Market's Bell Tower) ⑩が見えます。その向かいにはアロンズ・ホテル(Aaron's Hotel) ⑪です。

8 ディクソン・ストリート(Dixon Street)

儀式的の門を通り過ぎてすぐ左手を見上げてください。この古い建物にJong Wah(中華人民共和国)Associationとthe Dong Guan Goon Yee Tongという文字がペンキで標示してあります。この団体は19世紀にオーストラリアに運を試しに来た中国人の繁栄に積極的に関わりました。1917年以降、この建物は集会になっていません。

10 シドニー・マーケットのベル・タワー

土台の石は1910年のものです。この建物の大部分は破壊されてしまいましたが、1985年、この場所に大学が建てられた時に保護されました。キー・ストリートの古い荷車の入り口の1つに、農産物の業者、A Yeeの名がペンキで描かれているのが今でも分かります。

11 アロンズ・ホテル(Aaron's Hotel)

ウルティモ・ロード(Ultimo Road)にほぼ当時の状態のまま残っている、古い市場の建物の1つです。また、ウィング・オンビル(Wing On Building)としても知られ、長年この大規模な中国の会社が借りていました。1897年にシドニーに創立したウィング・オン社(Wing On Company)は、ナッツ類、茶、米、花火、生姜の輸入業者でした。最終的にはこのビジネスは中国と香港に戻り、大手小売業者になったのです。

ウルティモ・ロードに沿って今来た道を戻り、トーマス・ストリート(Thomas Street)に行きます。ウルティモ・ロードを歩いている間右手を見上げると、75-77番の建物のペディメントに「KMT 1921」 ⑫と刻まれた文字があるのが分かります。

12 クオミンタン(国民党)(KMT)

20世紀前半、中国の天皇を追放し、中国に最初の民主主義を導入した政治組織です。この建物はオーストラリアと太平洋の政党の本部でした。

コミュニティ

シドニーに住む様々な民族

ジョージ・ストリート(George Street)にたどり着いたら、道路を渡り、ヘイ・ストリート(Hay Street)に向かって北方向に歩きます。

13 ハイ・セント・チャンバース(Hay St Chambers)

ヘイ・ストリートとジョージ・ストリートの角に建つ小さな砂岩造りの建物は1875年に銀行として建てられました。長年の間、1階はカフェ、靴屋、ケーキ屋を含め、いろいろな用途に使用されました。1990年、シドニー市はこの建物を再構築し、1992年に市立図書館のヘイマーケット図書館としてオープンしました。そこに行くくと新聞や中国語、インドネシア語、韓国語、タイ語、ベトナム語の本が読めます。

市の中でも最も魅力的なリトルビジネス(14)と(15)を何軒か過ぎながらヘイ・ストリートを歩きます。

14 シリルの高付加価値食品

シリルはシドニーにある最古の調整食品店の1つです。1956年、チェコスロバキア人の移民、シリル・ヴァンツェツが開業し、半世紀以上経った今でも店で働く姿を見かけます。

15 ローマン・カフェの跡地

イタリア人のコーヒー職人が1960年代にザ・ローマ(The Roma)というカフェをオープンした頃、シドニーのコーヒーの質は改良され、ザ・ローマは忽ち盛えました。残念なことに、ザ・ローマは2005年に閉業しました。

ヘイ・ストリートの北側にある広場の中を歩くと、キャンベル・ストリート(Campbell Street)にぶつかります。ここでは更に面白い中国のお店があります。右手に見えるのはキャピトル・シアター(Capitol Theatre)(16)です。

劇場を通り過ぎ、キャンベル・ストリートの端まで歩きます。線路の鉄橋の下を歩き、エリザベス・ストリート(Elizabeth Street)の交差点を左折します。ここから、ハイド・パーク(Hyde Park)まで歩いてすぐです。途中、150番のオーストラリアン・ホール(Australian Hall)(17)とマーク・フォイズのデパート(Mark Foy's Emporium)(18)があります。

17 オーストラリアン・ホール(Australian Hall)

この小さな砂岩造りの建物は1912年から1913年に建てられ、様々な組織の施設になっていました。ドイツ人の社交クラブ、ローマン・カトリック信徒協会、劇場、キプロス・ギリシャ人のクラブなどの場所となっていました。しかし、最も重要なことはシドニーの先住民です。1938年1月26日、ヨーロッパ和解の150周年記念の時、アボリジニーのリーダー達が追悼の日を求め、完全なる市民権のために政治的要求のリストを作成しました。全域に渡り初のアボリジニーの市民権への動きとして知られています。この高度な文化と社会の重要性を踏まえ、この建物は国と国家遺産登録候補のリストに記載されています。建物は現在の所有者であるメトロポリタン・アボリジニー協会(Metropolitan Aboriginal Association)のために、最近改装されました。



写真提供: City of Sydney

16 キャピトル・シアター(Capitol Theatre)



写真提供: Ron Israel, City of Sydney Archives

この建物はジョージ・マックラエ(George McRae)がデザインをし、1892から1893年に、フルーツと野菜市場として、1860年代からある古い市場の隣に建てられました。元々は1階建てでしたが20世紀前半に階を増やし、サーカス場、映画館、劇場として使用されました。見上げると分かりますが、レンガ色のペディメントは驚くことに、フルーツやチョウコーのついでで飾られています。あまり目立たないチョウコーは、殆ど我々の野菜リストからは消えてしまっています。

1980年代までには、建物は非常に荒れた状態になりました。1990年前半、市議会のために、イポー・ガーデン(Ipoh Garden)が再構築しました。たくさん取り入れられた1920年代の室内装飾はアメリカから輸入し、夜空にちりばめた星に見せるかのような天井はロマンチックな中庭を演出しています。



写真提供: Mel Koutchavlis, /City of Sydney

18 マーク・フォイズのデパート

これは市内で最大規模のデパートの1つです。1909年のオリジナルの建物は3階建てで、マックレディー(McCredie)がデザインをし、アンダーソン(Anderson)が長年掛けて6階建てにしました。「靴下」「靴」「コルセット」などが描かれた独特の白い化粧レンガと、黄色とオレンジ色の中間色に見える赤レンガの飾りに注目して下さい。

街に行く交通手段として電車の利用が増えると、デパートは地下鉄駅から近い理由もあり繁栄しました。しかし、電車が更に北まで走るようになると、マーク・フォイズは古めかしい街外れとなり、1983年に閉業しました。今では法廷の場となり、公式にはダウニング・センター(Downing Centre)と呼ばれています。

コミュニティ

シドニーに住む様々な民族

ハイド・パーク(Hyde Park)がこのツアーの最終地点となります。この公園の南端にはアンザックの慰霊塔(ANZAC War Memorial) **19**があります。

19 アンザックの慰霊塔(ANZAC War Memorial)

ここはシドニーの最も興味深い芸術的装飾がしてある建物の1つです。ブルース・デリット(Bruce Dellitt)がデザインをし、1934年にオープンしました。イギリス生まれの移民、レイノール・ホフ(Raynor Hoff)作の彫刻があります。「生贄」と呼ばれる彼の素晴らしい屋内像は3人の女性が戦死した兵士を支えています。- 死によって深い悲しみに追いやられた生命の贈与者です。これは、よく力強い平和の象徴として解釈され、建設された当時、この慰霊塔に関する論争が数多く起こりました。この慰霊塔に名前は一切明記されておりませんが、ドーム上の天井にある120,000の星の数がニューサウスウェールズ州出身の兵士の数を意味しています。



写真提供: City of Sydney Archives

ハイド・パークの北にはアーチボルドの噴水(Archibald Fountain) **20**があります。

20 アーチボルドの噴水(Archibald Fountain)

この華やかな噴水はアポロ像とその他の神話の人物を表現しています。視力がよければ、像の北東側に刻まれている寓話文字で書かれた説明が読めることでしょう。そのひらめつきは古代ギリシャかもしれませんが、噴水はJ.F.アーチボルド(Archibald)が第1次世界大戦中のオーストラリアとフランスの組織を記念して、シドニーの人々に残したものであり、噴水のデザインはフランス人の彫刻家、フランソワ・シカール(Francois Sicard)によるものです。アーチボルドはザ・ブリテン(The Bulletin)という、作家にオーストラリアのことを記述するように呼びかける新聞の編集長でしたが、彼自身は自分でも認めるほどのフランスびいきでした。彼はきちんと手入れしたフランススタイルの髪を自慢げに生やし、クリスチャン名をジョン・フェルタムからジュール・フランソワに変更しました。殆どのドニーの住民はアーチボルドの人物については知りませんが、彼の噴水は人々に親しまれています。



写真提供: Lisa Murray, City of Sydney



歴史をたどるウォーキングツアー

このシリーズにはまだ他のウォーキング・ツアーのパンフレットがあり、更にシドニーの歴史跡を発見することができます。

詳細は市のウェブサイト

www.cityofsydney.nsw.gov.au/history

でご覧になれます。または、9265 9333のシドニー市までご連絡下さい。

視聴覚障害者専用は9265 9276です。

このパンフレットはシドニー市にあるヒストリー・プログラム(the History Program)によって資料収集されました。2005年11月、第四巻。

